

二〇二二年

国語 B入試 試験問題

監督の先生の「始め」という指示があるまで、次の注意をよく読みなさい。

注 意

- (1) 「始め」という指示で、すぐに受験番号を解答用紙と問題用紙の決められたところに書きなさい。
名前を書くところはありません。
- (2) 問題は(1)ページから(5)ページまであります。
- (3) 試験時間は四十五分間です。
- (4) 答えはすべて解答用紙の決められたところにていねいに書きなさい。
- (5) 印刷の文字がはっきりしないときは、手をあげて聞いてもよろしい。
- (6) 「やめ」という指示で、書くことをやめ、解答用紙と問題用紙を別々にして、机の上に置きなさい。

受験番号

番

名古屋商科大学
名古屋国際中学校

国
B③

※ 2021012401

国語

一次の二つの文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

文章1

何が面白くて駝鳥を飼うのだ。

動物園の四坪半のぬかるみの中では、

脚が大股過ぎるじゃないか。

頸があんまり長すぎるじゃないか。

雪の降る国にこれでは羽がぼろぼろすぎるじゃないか。

腹がへるから堅パンも喰うだろうが、

駝鳥の眼は遠くばかり見ているじゃないか。

瑠璃色の風が今にも吹いて来るのを待ちかまえているじゃないか。

あの小さな素朴な頭が無辺大の夢で逆まいてるじゃないか。

これはもう駝鳥じゃないじゃないか。

人間よ、

もう止せ、こんな事は。

(高村光太郎「ぼろぼろな駝鳥」)

文章2

鑑賞文

6年2組 名国太郎

私は、この作品を読んで作者の強い **A** を感じました。

まず、小さな動物園の檻の中に、大きな駝鳥が押し込められているよう

すが(a・八字) という言葉で表現されています。その駝鳥は遠くを

見つめています。そこから私は、(b・五字) は故郷である広い大地

を吹き渡る風を表しているのだと考えました。

次に、「飼うのだ」という言い方や、「(c・五字)」という言葉のくり返し、そして「人間よ、もう止せ、こんな事は。」に(d)法が使われていることから、作者の強い感情が現れていることが分かります。

作者はこの詩で、自由でいたい生き物をせまいところへ閉じ込めておくことへの **A** を表しています。そして、そんな詩を書いた作者も、何か不自由な思いをしたことがあるのかもしれないと思いました。

(一) **A** にあてはまる感情を、二字で答えなさい。

(二) (a) (c) にあてはまる言葉を、詩の中から指定された字数で抜き出して答えなさい。

(三) 「(d)法」にあてはまる表現技法を答えなさい。(ひらがなでもよい)

(四) 線部について、正しいものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 作者の海外へのあこがれを、サバンナから連れて来られたかわいそうなダチョウの姿に変えて表しているということ。

イ 作者の夫婦生活のすれ違いやいごちの悪さを、せまい場所に閉じ込められたダチョウの姿に変えて表しているということ。

ウ 作者が社会生活で感じた精神的な不自由さを、動物園のダチョウという姿に変えて表しているということ。

エ 作者の自分の作家人生に対する不安と期待を、いずれは羽を広げてはばたくダチョウという姿に変えて表しているということ。

二 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

道具仲間は、みんな順ぐりにこんなめにあって、こりてしまいましたので、ついに①はだれもツエねずみの顔を見るといそいでわきの方を向いてしまふのでした。

ところがその道具仲間に、ただ一人だけ、まだツエねずみとつきあってみないものがありました。

それは針がねを編んでこさえたねずみ捕りでした。

ねずみ捕りは全体、人間の味方なはずですが、ちかごろは、どうも毎日の新聞にさえ、猫といっしょにお払い物という札をつけた絵にまでして、広告されるのですし、そうでなくても、元来人間は、この針金のねずみ捕りを、一ぺんも優待したことはありませんでした。ええ、それはもうたしかにありませんとも。それに、さもさわるのさえきたくないようにみんなから思われています。それですから実は、ねずみ捕りは人間よりはねずみの方に、よけい同情があるのです。けれども、たいていのねずみはなかなかこわがって、そばへやって参りません。ねずみ捕りは、毎日やさしい声で、②「ねずちゃん、おいで。今夜のごちそうはあじのおつむだよ。お前さんの食べる間、わたしはしっかり押えておいてあげるから。ね、安心しておいで。入り口をパタンとしめるようなそんなことをするもんかね。わたしも人間にはもうこりこりしてるんだから。おいでよ。そら。」

なんてねずみを呼びかけますが、ねずみはみんな、

「へん、うまく言っちゃあ。」とか、

「へい、へい。よくわかりましてございます。いずれ、おやじや、せがれとも相談の上で。」とか言ってるそろそろ逃げて行ってしまいます。

そして朝になると、顔のまっ赤かな下男が来て見て、

「またはいらぬ。ねずみももう知ってるんだな。ねずみの学校で教えるんだな。しかしまあもう一日だけかけてみよう。」と言いながら、新しい

えさととりかえるのでした。

今夜も、ねずみ捕りは叫びました。

「おいでおいで。今夜はやらかな半ぺんだよ。えさだけあげるよ。大丈夫さ。早くおいで。」

ツエねずみが、ちょうど通りかかりました。そして、

「おや、ねずみ捕りさん、ほんとうにえさだけをくださるんですか。」と言いました。

「おや、お前は珍しいねずみだね。そうだよ。えさだけあげるんだよ。そら、早くお食べ。」

ツエねずみはブイツと中にはいって、むちゃむちゃむちゃと半ぺんを食べて、またブイツと外へ出て言いました。

「おいしかったよ。ありがとう。」

「そうかい。よかったね。またあすの晩おいで。」

次の朝、下男が来て見ておこって言いました。

「えい。えさだけとって行きやがった。ずるいねずみだな。しかしとにかく中にはいったというのには感心だ。そら、きょうはいわしだぞ。」

そしていわしを半分つけて行きました。

ねずみ捕りは、いわしをひっかけて、せつかくツエねずみの来るのを待っていました。

夜になって、ツエねずみはすぐ出て来ました。そしていかにも恩に着せたように、

「今晚は、お約束どおり来てあげましたよ。」と言いました。

ねずみ捕りは少しむっとしたが、無理にこらえて、

「さあ、食べなさい。」とだけ言いました。

ツエねずみはブイツとはいって、ピチャピチャピチャと食べて、またブイツと出て来て、それから大風※2おおふうに言いました。

「じゃ、あした、また、来て食べてあげるからね。」

「ブウ。」とねずみ捕りは答えました。

次の朝、下男が来て見て、ますますおこって言いしました。

「えい。ずるいねずみだ。しかし、毎晩、そんなうまくえさだけ取られるはずがない。どうも、このねずみ捕りめは、ねずみからわいろをもらったらしいぞ。」

「もらわん。もらわん。あんまり人を見そこなうな。」とねずみ捕りはどなりましたが、もちろん、下男の耳には聞こえません。きょうも腐った半ぺんをくつつけていきました。

ねずみ捕りは、とんだ疑いを受けたので、一日ぶんぶんおこっていました。夜になりました。ツエねずみが出て来て、さも大儀らしく言いしました。「ああ、毎日ここまでやって来るのも、並みたいいのこっちゃやない。それにごちそうといたら、せいぜい魚の頭だ。いやになっちゃう。しかしまあ、せっかく来たんだからしかたない。食ってやるのでしょうか。ねずみ捕りさん。今晚は。」

ねずみ捕りは、はりがねをぷりぷりさせておこっていましたので、ただ一こと、

「お食べ。」と言いました。ツエねずみはすぐプイツと飛びこみましたが、半ぺんのくさっているのを見て、おこって叫びました。

「ねずみどりさん。あんまりひどいや。この半ぺんはくさってます。僕のよくな弱いものをだますなんて、あんまりだ。償ってください。償ってください。」

ねずみ捕りは、思わず、はり金をりゅうりゅうと鳴らすくらい、おこってしまいました。そのりゅうりゅうが悪かったのです。

「ピシャッ。シインン。」えさについていたかきはずれて、ねずみ捕りの入り口が閉じてしまいました。さあもうたいへんです。

ツエねずみはきちがいのようになって、

「ねずみ捕りさん。ひどいや。ひどいや。うう、くやしい。ねずみ捕りさ

ん。あんまりだ。」と言いながら、はりがねをかじるやら、くるくるまわるやら、地だんだふむやら、わめくやら、泣くやら、それはそれは大ききです。それでも、償ってください、償ってください、もう言う力がありませんでした。

ねずみ捕りの方も、痛いやら、しゃくにさわるやら、ガタガタ、ブルブル、リュウリュウとふるえました。一晚そうやってとうとう朝になりました。

顔のまっ赤かな下男が来て見て、こおどりして言いしました。

「しめた。しめた。とうとう、かかった。意地の悪そうなねずみだな。さあ、出て来い。こぞう。」

(宮澤賢治『ツエねずみ』)

※1 元来：はじめから

※2 大風に：えらそうに

※3 大儀らしく：めんどうそうに

(一) 線部 a、d の語句について、本文中の意味としてそれぞれあてはまるものを選び、記号で答えなさい。

ア 作り上げた

イ 順番に

ウ 相手のためにしたように大げさに言った

エ 評価をあやまる

(二) — 線部 A 「ぶんぶん」と同じ種類の言葉を、次から選んで記号で答えなさい。

ア わんわん

イ ガタンゴトン

ウ スラストラ

エ こけこっこー

(三) — 線部①「ついにはだれもツエねずみの顔を見るといそいでわきの方を向いてしまうのでした」とあるが、ツエねずみのどのような性格が問題なのか。ここより後の部分を読んで考え、簡潔に答えなさい。

(四) — 線部②「ねずちゃん、おいで」について、「ねずみ捕り」がこのようにさそう理由を、ここより前の部分から二十六字で抜き出し、最初の八字を答えなさい。

(五) — 線部③「ねずみ捕りの入り口が閉じてしまいました」とあるが、それはなぜか。正しいものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 言いがかりをつけるツエねずみが憎らしくなり、捕まえてやろうと思ったから。

イ もともといらだっており、怒った拍子に、思わずかぎが外れてしまったから。

ウ わがままなツエねずみに嫌気がさし、こらしめてやろうと思ったから。

エ 今まで優しくしていたのは、こうして捕まえるためであったから。

(六) — 線部④について、次の会話文は生徒たちが「ツエねずみ」を意地悪かどうか話し合っている場面である。() にあてはまる文章を、それぞれ考えて答えなさい。

生徒ア「僕は意地悪なねずみだと思う。ねずみ捕りに優しくしてもらったのに、一回嫌なことがあったくらいであんなことを言うのはひどいよ。」

生徒イ「確かにひどいけれど、私は人からもらったものが腐っていたら、その人のことが (a) しまうな。」

生徒ウ「確かに、ツエねずみはひどいことを言ったけれど、相手を傷つけようと思って言ったわけではないよね。」

生徒ア「わざとじゃなかったら (b) ？」

生徒ウ「そういうわけじゃないけど……。」

生徒イ「でも、それは (c) だよね。」

(七) この物語の文章の特徴として、あてはまるものを二つ選び、記号で答えなさい。

ア ぎ態語やぎ音語を多用して物語に童話らしさを出すのと同時に、残酷な終盤を際立たせている。

イ ひゆ表現を多用することで幻想的な雰囲気を作り出し、命のはかなさを考えさせる内容になっている。

ウ 風景描写に力を入れており、読む人に安らぎを与えるような、動物と人間のふれあい描かれている。

エ 動物や物をぎ人化することで童話として成り立っているが、内容は人間の世界でも起こりうることである。

三 語句について、次の問いに答えなさい。

(一) 次の四字熟語について、□には同じ漢数字が入る。□に入るものを答えなさい。

① □進□退

② □発□中

③ □分□分

(二) 次の——線部の敬語について、間違っているものは正しい敬語に書き直し、正しいものは敬語の種類を答えなさい。なお、漢字がわからない場合はひらがなで答えてもよい。

① 「先生はどちらにお住まいですか。」(子どもが先生に向かって)

② 「お気にめしましたでしょうか。」(店員がお客に向かって)

③ 「それは僕がめし上がるものです。」(子どもが親に向かって)

(これで問題は終わりです。)